

ヘクター・ドイルvs宮 本武蔵

かてさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

烈海王が死んだ。その敵を討つために一人の死刑囚が動き出した。

目次

二度目の脱獄

1

二度目の脱獄

烈海王が死んだ。これには日本の格闘士達を震撼させた。そして、震撼させたのは日本だけにどどまらず、中国、米国、そして英国にも。

イギリス カリオス刑務所 ここには最凶死刑囚であるヘクター・ドイルが収監されている。

97::98::99::ドイルは正拳を行っていた。勝己から教わったたった一つの技（繋がり）ドイルは約束を守っていた。視力を失い得た力、更には自ら鼓膜を破壊。それによつて得た敏感な皮膚。全ては強くなるため。

ドイルはベッドに入り眠りに着いた。何時でも脱獄は可能。それくらいの力を彼は手に入れていた。しかし、彼はその時が来るまでここから出ようとはしなかった。

早朝 全身が、否、細胞が感じ取った。思わず起き上がる。なにかが起きた。謎の不安感。これは…自分自身のものでは無い。そう気がついた。

カツ、カツ、カツ…

看守が歩いている音が聞こえた。

「なあ、」

「どうしたんだね？ドイル君？」

毎日行ってきた正拳突きが看守の顔面に叩き込まれた。

行かせてもらおう東京に

「こんな無茶振りはもうこれまでにして欲しいな」

空軍の飛行場でストライダムはそう言った。

「日本で何かあったか？」

「ビッグニュースが2つ。ムサシ ミヤモトがクローンにより復活したこと。そして烈が殺された。ムサシに」

「本当か？」

「ああ。君を倒した彼だがムサシには勝てなかった」

「…仇は私が討つ」

「…そういうえば鼓膜を破ったと聞いていたが…」

「数ヶ月もすれば自然に治る。失いたくなつたときにまた破れば良い」

「…体内の武器はどうなっている？」

「逮捕されたときに外されたがスプリングだけは残ってる。もつとも私には必要ないがね」

「…獅子とトンボの戦いだな」

「御老公大変です。武蔵と試合したいという者が海外から来てまして」

「だれじゃ？その者は強いのか？」

「そ、それが…」

「ツ…！ヘクター・ドイルじゃと!!!」

神心会本部

ドイルは愚地克巳と再会した。

「久しぶりだな。」

「ああ。セイケン毎日1000回やってるよ」

「で、わざわざ脱獄して何しに来たんだ？」

「敵討ち。それだけで充分だ」

「やれるかどうか」

「ルールは問題ではない」

「そうだよな。死刑囚だもんな。手段は選ばなくていい。まあ、こんな話するよりも鍛

えたんだろ？やるかい？組み手」

「ああ」

「待ってくれ」

鎬昂昇が遮るように話し込んだ。

「君は…空手家の」

ドイルは驚いた声で話した。

「君に破れたことに恨んではない。しかし、我々を差し置いて武蔵と戦うことは許さない。君では無理だ」

昂昇は構えて言った。

「つまり戦…」

ドイルが言いかけたその時右の手刀がドイルの左腕を襲った。